

令和 2 年 6 月 6 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03025

研究課題名(和文)「5文型の祖型」の英語教育史的研究

研究課題名(英文) Research of the 'Five Forms of the Predicate' in terms of English Education History

研究代表者

川嶋 正士 (Kawashima, Masashi)

日本大学・工学部・教授

研究者番号：50248720

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：主な研究成果は、文法用語 Complement の起源を遡上したこととその背景にドイツで生まれた統語分析法の影響があることを示したこと、提唱された文法用語が現在の形に収束する過程を明らかにしたこと、ドイツ語の統語分析の英文法への適用を初めて解明したこと、日本で最初に「5文型」を提唱したとされる細江逸記が統語分析において保守的な姿勢を保持したこととその目的を明らかにしたことである。

また、として、この3年間でハンガリー科学アカデミーの生成文法研究者と研究を重ね、規範文法における2次叙述の理論的研究について議論した結果、今年度より「二国間交流事業共同研究」を開始する基礎が固まった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本で人口に膾炙する「5文型」であるが、これまでの研究はその記述力や教育効果のみに限られ、「5文型」が日本で紹介されるまで、どのような経緯をたどったのか、また誕生の経緯などに理論的正当性が見られるかについてほとんど研究がされずに教授・学習されていることが問題の根柢となっていた。

この点に関し、現在再評価がなされつつある。その中心に本研究があった。大学での研究のみならず、現場の教育者の間にも、本研究の成果の発表を通じて同様の問題意識が共有され始めた。

さらに、海外でも本研究の独自性が認められ、論文に引用されたり、共同研究の申し込みがあるなど、今後の発展に期待が持たれる有意義な成果を残せた。

研究成果の概要(英文)：The main results of my research has been: (a) to have tracked back the origin of the grammatical term Complement and to have shown that at the bottom of this lay the grammatical theory of a German philologist, Carl Ferdinand Becker, (b) to have shown the process of the making up of each terminology the Five Forms of the predicate now seen in Japan, (c) to have shown the role that Becker played in the shift of analytical method in the 19th century, (d) to have shown that Itsuki Hosoe, the alleged founder of the Five forms of the Sentence, stuck to the old Prescriptive analysis of the predicate, although he advocated the new Scientific grammatical approach.

Finally the repeated meetings with the researchers at the Hungary Academy of Science has led to the Joint Mobility Research Grant that started this April.

研究分野：英文法教育史

キーワード：5文型 文法用語 統語分析 Complement Indirect Object 規範文法

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、「5 文型」を英語教育史の面から検証することを目的とした。日本において人口に膾炙する「5 文型」であるが、海外でほとんど知られていない。また、日本で英文法史・英語教育史が盛んであるにもかかわらず「5 文型」はほとんど史的に研究されなかった。

日本で「5 文型の祖型」に関して史的研究が発表されたのは最近のことであった(川嶋(2015a)、宮脇(2012))。その後、報告者が研究発表を続けることにより英語教育史、比較文化論、言語情報分類学などの分野で研究に対する反響が広がりつつあった。(川嶋(2015, b, c, d, 2016))。

「5 文型の祖型」とされる *Forms of the Predicate* は、19 世紀末に英国で刊行された *Parallel Grammar Series* という文法書シリーズにみられる。ところが、このシリーズの全体像と刊行の趣旨について、日本ではまったく知られていなかった。

編集者の Edward Adolf Sonnenschein は英語の専門家ではなく古典学者であった。「祖型」提唱の真の目的は当時の英国の高等学校で必修であった国語としての英語、現代外国語としてのドイツ語とフランス語、古典語としてのラテン語とギリシャ語の 5 か国語で文法用語と分類を統一する根柢を築くことであった。

古典学者が多言語習得のために「祖型」を提唱した目的には 19 世紀末の社会的・教育的な要因があった。教育の大衆化に伴い当時必修であった古典語は教育課程から排除されつつあった。Sonnenschein は、古典語の格変化などを取り入れた「祖型」を用いて 5 か国語の並行学習に貢献することで古典語の地位を保全しようと試みた。この目的のために 1885 年にバーミンガムで文法研究会 (Grammatical Society) が設立され、1889 年より「祖型」による形式分析を提唱する *Parallel Grammar Series* が刊行された。しかし、「祖型」は 5 年で破たんした。原因は、中世以来学問や公文書の回で共通語とされてきたラテン語文法の体系で、膠着言語となった英語を始めあらゆる言語の分類を統一しようとしたことであった。

1894 年に刊行された「ギリシャ語文法」では編集責任者であり、著者の Sonnenschein 自身により「祖型」が放棄された。それ以降 *Parallel Grammar Series* 以外で「祖型」を用いる文法書は日本以外に存在しない。

報告者は、平成 22 年以降に生成文法の知見を活かし伝統文法の「8 品詞」や「5 文型」を理論的に分析する研究をしてきた(川嶋 2010, 2012, 2013)。その時「8 品詞」は国内外で研究が進んでいるが海外における「5 文型」研究が皆無であることに疑問を覚えた。日本でも宮脇 (2012) 以外に「5 文型」を史的に論じたものはなかった。専ら報告者自身で開拓を始めた研究であったが、発見される事実は衝撃の連続であった。その成果は平成 26 年以降申請時まで 11 本の論文と 1 冊の著書となって表れた。

しかし、まだ、統語解析 (syntactic parsing) の誕生と発展の過程で生まれた文法用語が *Parallel Grammar Series* とどのように関連付けられるか、誰も詳らかにしていない。また、*Parallel Grammar Series* における「祖型」の誕生と消滅の経緯に関しても資料不足で実証的に究明されていない。これらを究明するために英米における「祖型」誕生前後の英文法の関連文献を網羅的に調査し包括的に分析する必要があると考えるに至った。

「5 文型」は、日本の英語教育で当然の教義として定着している。平成 21 年に告知された高等学校学習指導要領において「文型」という表現が消滅したが、現在でも「5 文型」もしくはその精神は払しょくされず、いまだにこれを掲載する教科書もある。

これまで「5 文型」を用いた教授法の有効性や「5 文型」の記述力などについては議論がなされてきたが、「5 文型」を擁護する者も反対する者も「5 文型」に対して史的視点から実証的な調査・研究をしたことがなかった。つまり「5 文型」はいつ、誰によって、どのような目的で提唱されたのか、そしてどのような結果に終わったのか、史的に正しく検証されないまま教育の現場に導入され、国家的規範文法となった。

### 参考文献

川嶋正士「二重目的語構文」と「第 4 文型」—「5 文型」編成における機能と形式の乖離—『国際文化表現研究』11, 273-288, 2016a

川嶋正士「二重目的語」の誕生—英文法における統語分析の萌芽—『比較文化研究』119, 69-80, 2015d.

川嶋正士「100 年前の Principle and Parameter: E.A. Sonnenschein の失敗の原因と帰結」『比較文化研究』116, 141-160, 2015c

川嶋正士 “Why Have Students Hated Grammar? Historical Study of Its Incomprehension in England and Japan and a Comprehension Based Alternative”, *Expressions*, 11, 149-168, 2015b.

川嶋正士『「5 文型」論考—Parallel Grammar Series, Part II の検証』

川嶋正士 “A Theory of Binarism and Its Extension II: Application to the Taxonomy of Parts of Speech.”, *Journal of College of Engineering, Nihon University*. 54/2, 51-64, 2014

川嶋正士 “Cross Classifying Sentence Patterns.” *Journal of College of Engineering, Nihon University*. 52/1, 67-78, 2010.

川嶋正士 “A Theory of Binarism and Its Extension I: Binarism and Configurationality.” *Journal of College of Engineering, Nihon University*. 63/2, 27-40, 2012

宮脇正孝. 「5 文型の源流をさかのぼる: C.T. Onions, An Advanced English Syntax (1904) を超えて」『専修人文論集』90, 437-465, 2012.

## 2. 研究の目的

以上の背景から始まる研究では、大きく 2 種の研究疑問が見られた。第 1 は、19 世紀に「補語 (complement)」、「間接目的語 (indirect object)」等の「5 文型」の要素となる文法用語が誕生した経緯の研究である。Morell (1852), Mason (1858) など、19 世紀半ばに見られる文法書において、それまで支配的であった品詞分解による品詞解析 (etymological parsing) から語の機能による統語解析へと教授法が転換されたことは今までの研究で明らかにされている。

しかし、その遠因が海外における教授法の改革にあったことは認知されずに今日まで至った。特に、当時の英文法に大きく影響を与えたのが Carl Ferdinand Becker というドイツ人の文献学者によるドイツ語文法書 (*A Grammar of the German Language* (1830)) であったことは、看過されてきた。この文典は、文の中の関係を修飾・叙述・目的という現代の学習英文法に通底する方式で統語的に分析した。

Becker がドイツ語文法で提唱した体系は英文法に大きく影響を与えた。しかし、ドイツ語のために考案された分析法がそのまま英語に適用できるわけではなかった。例えば 'He is sick' のような文において、Becker は 'sick' を述部として、'is' にあたる部分を Copula (連結辞) とみなした。

ところが、英語で 'be' にあたる部分は、主語と呼応し、時制を持つなど、動詞として扱われるべき特徴を持つ。英文法において統語解析を創始したとみられる Morell や Mason の英文法書にどのように取り入れられたのかを解明することであった。

Morell や Mason が提唱した体系で、英語に特有の文法用語の誕生の経緯と、提唱の目的を研究することが研究の主軸であった。

第 2 として、これらの文法用語に依拠する分析が「5 文型」に正しく継承されているかつづさに検証することを目的とした。

## 参考文献

Mason, Charles Peter. *English Grammar: Including the Principles of Grammatical Analysis*. London: Walton and Maberly. 1858.

Morell, John Daniel. *The Analysis of Sentences Explained and Systematised*. After the Plan of Becker's German Grammar. London: A. Ireland & Co., 1852.

## 3. 研究の方法

本研究では、国内外の文献を大規模に収集し、それらを調査することで、研究を深化させることを目的とした。これまで通り、Google Books や Internet Archive での検索に加え、これまで資金的な理由で実行できなかった欧米での文献調査に取り組み、入手困難な文献を多く調査した。それらの資料から統語分析の発達や変遷を研究した。

国外では、英国の大英図書館、オーストラリアのニュー・サウスウェールズ図書館、ニューヨーク公共図書館などで調査を行った。

国内では、国立国会図書館、国立教育政策研究所附属教育図書館、教科書研究センター附属教科書図書館などで調査を行った。

特に、初年度に英国バーミンガム大学大学院在学の伊藤あずさ氏とドイツビーレフェルト大学の John Walmsley 教授と研究打ち合わせを出来たことは意義深かった。この後、両氏より、多くの資料・情報提供を得られ、海外渡航の時間と経費が大幅に削減できた。

このほか、個人研究者の蔵書なども調査させていただくことで研究を進めることが出来た。

これらの大規模な調査により得られた資料を様々な角度から分析することで多くの論文や研究発表が生まれた。

## 4. 研究成果

研究は、国内外で大きな成果をあげることができた。3 年間で 9 本の学術論文が採択された。これらは、いずれも日本学術会議協力学術研究団体における有審査論文である。

研究発表は 8 件行った。そのうち国外では、2 つの国際会議で発表を行った。特に、2018 年にパリで開催された International Journal of Arts and Science での発表は、大きな評価を受け、Certificate of Excellence を授与されることとなった。この他は、招待講演 3 件と上記学術研究団体の全国大会での発表が 2 件であった。さらに 1 件の書評を委託された。

新規な知見のうち、インパクトが大きなものは、主として 5 種類ある。

### 研究成果 文法用語 Complement の起源に関する発見

第 1 の成果は、「5 文型の祖型」が提唱された Parallel Grammar Series を研究する一環として、Complement という用語が用いられた起源をこれまでの定説より 10 年さかのぼる文献を紹介し、その統語理論の全容を明らかにしたことである。1991 年に Complement の起源遡上に関する論文が発表されて以来、約 20 年間、1858 年に書かれた文献に見られるものが最も古いものであるというのが定説であったが、それを 10 年さかのぼる 1848 年に Thomas Kerchever Arnold という人物によって書かれた文法書に Complement という用語が見られることを示し、その内容を詳細に検証した。またこの文法書に直接影響を与えた Becker の文法体系について紹介した。

## 参考文献

伊藤裕道「補語」の成立—19世紀英文法の「文の分析」『英語英文学論叢』13, 65-81, 1991.  
Arnold, Thomas Kerchever. *English Grammar, for Classical Schools, with Questions, and a Course of Exercises; Being a Practical Introduction to English Prose and Composition.* (4th ed.) London: Francis and John Rivingston, 1848.

#### 研究成果 現在の学習文法に至る文法用語の確立についての知見

研究成果 から、Mason (1858) において Complement と Indirect Object という文法用語が、現在の学習文法に見られる形で定型化されるまでの英文法史を詳細に研究したことは、日本における英文法史研究に新しい知見を加えた意義深いものであった。

#### 研究成果 Becker の文法体系と英文法の変異についての報告

19世紀後半の英文法史研究の世界的権威である John Walmsley や Richard Hudson は、筆者が言及するまで19世紀半ばに見られた分析法の変化とその区別及び Becker が果たした役割について知悉しておらず、筆者が提供した文献情報 (Fletcher 1891) の記述内容は大きな衝撃を以て受け取られた。

“One things I definitely want to mention: I spent about ten days in London and Oxford before Easter, and your Fletcher recommendation is, I think really important and useful. I have passed it on to Dick (= R.A.) Hudson in UCL. The most interesting articles are on Parallel Grammars, English, Sentence Analysis and Grammar, because they also document the influence of C.F. Becker in English grammaticography.”

(Walmsley, p.c. May 15, 2019).

#### 参考文献

Fletcher, Alfred Ewen (ed.). *Sonnenschein's Cyclopaedia of Education.* London: Swan Sonnenschein, 1892.

#### 研究成果 「5文型」の提唱者の文法観の検証

さらに、助成金で国立国会図書館をはじめ、国内の研究機関を訪問することができたおかげで、日本における英文法史の中での「5文型」の史的研究も可能となった。日本で「5文型」を最初に提唱したとされる細江逸記の著作に対して網羅的な調査が可能となった。「科学文法」を標榜した細江であったが、統語分析に関しては、規範文法の枠組みに立脚した。また、現代英語の形式的記述ではなく、古今東西の様々な言語を研究対象としたことの目的は、言語哲学的に普遍的な文法体系を構築することであったことを解明した。

#### 研究成果 文法理論への還元

19世紀の規範英文法に見られる知見は、実証的なものではないが、さまざまな示唆に富む。生成文法理論における2次叙述 (Secondary Predication) 研究の第一人者であるハンガリー科学アカデミーの Marcel den Dikken は報告者の研究と、現在研究中である2次叙述の分析に接点を見出し、国際的な共同研究が始まった。これに日本とハンガリーから1名ずつ研究者が加わり、2020年度より日本学術振興会の「二国間交流事業共同研究」に採択され、今後2年間研究を深化させる予定である。

また、当時ジュネーブ大学に在籍していた Ji Shim Young 博士との研究交流によって、19世紀規範文法の正当性を文法理論的に検証することが可能となった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 川嶋正士	4. 巻 18
2. 論文標題 細江逸記の二元的英文法観：その目的と問題点	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本情報ディレクトリ学会誌	6. 最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋正士	4. 巻 138
2. 論文標題 19世紀英文法の統語分析の誕生と発展について－「5文型」の文の要素が完備するまで－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 比較文化研究	6. 最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋正士	4. 巻 136
2. 論文標題 文法用語 Complement の誕生とその統語的背景	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 比較文化研究	6. 最初と最後の頁 207-219
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋正士	4. 巻 134
2. 論文標題 明治末期英文法に見られる統語分析の発達－「5文型」の基盤構築過程	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 比較文化研究	6. 最初と最後の頁 57-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋正士	4. 巻 15
2. 論文標題 「5文型」の発展と普及に関する史的研究ー1917～1946	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際文化表現研究	6. 最初と最後の頁 125-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋正士	4. 巻 17
2. 論文標題 細江逸記の科学文法観と「5文型」の経験的妥当性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本情報ディレトリ学会誌	6. 最初と最後の頁 10-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋正士	4. 巻 129
2. 論文標題 完成要素としての 'Object' : Complement 誕生前夜	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 比較文化研究	6. 最初と最後の頁 65-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋正士	4. 巻 14
2. 論文標題 明治末期の英語教授法の変遷の国際的背景	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際文化表現研究	6. 最初と最後の頁 68-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋正士	4. 巻 16
2. 論文標題 Morell (1852) の統語分析とその現代的解釈	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本情報ディレクトリ学会誌	6. 最初と最後の頁 28-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋正士	4. 巻 33
2. 論文標題 (書評) 中村捷編著 『名著に学ぶ これからの英語教育と教授法』 (開拓社, 2016)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本英語教育史研究	6. 最初と最後の頁 123-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計8件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 川嶋正士
2. 発表標題 Henry Sweet (1891/1898) における規範性 と Onions (1904) における 科学性
3. 学会等名 日本英語文化学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川嶋正士
2. 発表標題 日本の英語検定教科書に見られる文分類の発達 「5文型」断章 2019
3. 学会等名 日本英語教育史学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KAWASHIMA, Masashi
2. 発表標題 A Historical Perspective of the Introduction of 'Five Sentence Forms' Uniquely Taught in Japan., June, 2018
3. 学会等名 International Journal of Art and Science (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川嶋正士
2. 発表標題 『英語青年』から読み取る細江逸記の規範的文法観：「5文型」断章2018
3. 学会等名 日本英語教育史学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川嶋正士
2. 発表標題 細江逸記の科学文法観 「5 文型」研究中間報告 2018
3. 学会等名 日本情報ディレクトリ学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川嶋正士
2. 発表標題 19世紀規範統語論における「完成」という概念：「5文型」断章2017
3. 学会等名 日本英語教育史学会
4. 発表年 2017年



1. 発表者名 Kawashima, Masashi
2. 発表標題 Five Forms of the Predicate; The Progenitor of Idiosyncratic Grammar Teaching Seen Only in Japan
3. 学会等名 International Journal of Arts and Science (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 川嶋正士
2. 発表標題 Morell (1852) における「完成」に関する考察 「5文型」研究中間報告2017
3. 学会等名 日本情報ディレクトリ学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

日本大学工学部総合教育 <a href="http://kenkyu-web.cin.nihon-u.ac.jp/Profiles/47/0004610/profile.html">http://kenkyu-web.cin.nihon-u.ac.jp/Profiles/47/0004610/profile.html</a>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考